

エコたま



グリーン NEWS

多摩市民環境会議機関紙 第124号(通巻第184号)
2014年5月8日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は
常駐していません)e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

一ノ宮用水、改修後の生き物調査



市内の西北部地区を流れる一ノ宮用水(真明寺裏)では、護岸の改修前の昨年11月16日に生き物調査が行われた。(本紙第119号に調査報告書掲載)そして、自然や生き物に配慮された改修が行われたあとの実際の状況を調べようと、4月26日午前、今度は調査場所も増やし、スタッフも増やし(前回は3人、今回は8人)で調査を実施した。

今回の調査場所は、小野神社寄りの以前コンクリート2面張りに改修された区間、真明寺裏の3月に改修が行われた区間、そしてやや上流の以前に3面張りに改修された区間の3カ所。長さはいずれも20m。

調査の方法は、担当の西田一也講師の母校である東京農工大がこれまで多摩地域で行ってきた調査方式。20mの上下端をサデ網で仕切り(生物の流入と流失を防ぐ)、3人のスタッフが手網でガサガサを行いながら生物を採集する。ガサガサの時間は各30分で、採集された生き物はバケツに入れて保管。



トウキョウダルマガエル 採集された生き物はバットに移して同定、計数する。うち魚類については全長・標準体長を記録する。エビ類などは持ち帰って同定する必要があるものはエタノールで固定して持ち帰るが、それ以外は調査終了後に放流する。

午前9時30分ごろより行われた調査では、最初の区間は2面張りの岸に沿って植物のショウブが植えられ、魚類の隠れやすい部分が多かったせいかドジョウやエビなどが多く採集された。

2番目の3月に改修が終わった部分では、田んぼ側ドジョウ、ザリガニ、ヤゴの岸に沿って木杭が施されていたものの、川底には白い碎石がまかれて生き物のいにくそうな環境だったためか、それほど採集できなかったが、ちょうど



用水と田んぼの水路が交わる地点で準絶滅危惧種のトウキョウダルマガエルが発見された。

3番目の上流の3面張りの区間でも、川底は泥が堆積していたため、こちらでもけっこう採集された。最後に生き物の越冬場兼身をかくす場所であるコンクリート板の橋の下も調査して終えた。

採集された個体は、ドジョウ、シオカラトンボのヤゴ、トウキョウダルマガエル、カワニナ類、カワリヌマエビ属エビ類、アメリカザリガニ、シジミ類、ガムシ類など。量としてはエビ類やドジョウが多かった。

西田講師の談話。お陰さまで予定していた調査を行うことができました。魚類ではドジョウしかいませんでしたが、整備直後としてはとくに問題はないと思います。一方、準絶滅危惧種で低平地の水田に生息するトウキョウダルマガエルの幼体が見られるなど、水田地帯の生態系を感じる事ができました。

今日の結果は、今回の整備に対する感想とともにまとめさせていただきます。整備に関して少し述べさせていただきますと、やや全体的に直線的な印象はあるものの、田んぼ側護岸を木杭とし、橋の下を越冬場として深くしていただけるなど、生き物への配慮は最大限していただけたと思います。

とくに越冬場造成は全国でもまだ例のない整備事例です。このような整備がよかったと評価できるよう今後もしっかりと調査を行っていきたいと思います。どうかご協力よろしくお願いします。

よみがえれ、大栗川を楽しむ会のリーダー会員の談話。改修工事では水路をコンクリートで頑丈にするという従来の視点だけでなく、生育時期によって田んぼの中と用水路を行ったり来たりできるよう配慮するなど、生き物にも配慮した設計を取り入れています。「大栗川を楽しむ会」と多摩市環境部環境政策課が調査を行い、(用水の管理を担当する)多摩市都市整備部下水道課に提案して実現した試みです。水路全体からみればほんの一部ですが、市民と調べ、市民と学びながら生き物目線を育もうとする環境政策課の取り組みに期待しましょう。

“クッキー小屋”、建設始まる

多摩第一小学校の生徒たちのアイドル、ヤギのクッキーと2匹の子ヤギのために、学校の先生や地域の大人たちが飼育用の小屋を建てる「楽園クッキーProject」が始まり、5月3日の日中、まず小屋の柱づくりに精を出した。柱と柱を組み合わせるための溝彫りとそこに組み合わせ材削りで、簡単な設計図に基づいて7人がかりで慣れぬ作業を電動工具やのみで進めた。

その結果、午後2時ごろまでにはつくり終え、組み合わせてみたところ、しっかりとできて及第点。いったん柱をばらしてヤギの運動場隅に保管。10日の土曜日に板壁を張って完成させる。一柱を組み合わせた結果は!



こどもまつり、今年もにぎやかに開催



大型連休中の5月3日から5日まで開かれた「ガーデンシティ多摩センターこどもまつり」は、パルテノン大通り周辺を中心に今年も多くの子もたちや市民が詰めかけ、にぎわった。

警視庁のピーポくんが人気 中央公園の大池では「カヌー教室」には順番待ちの長い行列ができ、大階段上の「バンジートランポリン」やアウトドア遊び「モンキーブリッジ」などで本格器具を使ったおもしろ体験をするのだが、池畔の「昔遊びコーナー」での竹馬や竹ぼっくり遊びなども、子どもたちは新感覚ととらえてうれしそう。



1年後の自分に手紙を書く また、多摩センター駅から上がったすぐのところでは、「1年後のぼく・わたしに」として子どもたちが1年後の自分に手紙を書いて現場のポストに投函し、来年の同時期にそれを主催の多摩青年会議所が書いた本人に郵送する仕組み。「手紙を書くことで子どもたちの創造力が膨らみ、将来の夢を持つきっかけになるのでは」と主催者。

毎年、国士舘大学の学生組織が開いている、子ども対象のAED（自動対外式除細動器）の操作講習会は、今年受講者が去年までの倍以上に増えていた。喜ばしい風景だ。

多くの参加者を集めた国士舘 多摩センターの主役であるサンリオのハローキティを始め、警視庁のピーポくんなどキャラクターなどとの記念写真撮影も花盛り。遠くはレンガ坂のフリーマーケット（3日間）まで、とにかく多摩センター周辺、どこもかしこも祭りの高揚した雰囲気包まれていた。

人類の水・争奪から持続可能へ

今年2月に行われた「第7回東京都民環境セミナー」で行われた講演のタイトルが上に掲げたもの。講師はアクアスフィア（水問題調査コンサルタント会社）代表の橋本淳司氏。その講演内容の概略を以下に紹介したい。

わたしは学生時代から水問題に関心を持ち、上水道の「おいしい水」を各地で飲み比べた。緩速濾過、急速濾過など浄化の仕組みに関係することを学んだ。スリランカの水事情調査に関わる機会を得て水に対するイメージが変わった。溜まり水のような小川が水源。子どもたちが下痢、脱水症で死亡していく実態を直接目にした。

煮沸して飲めば助かる命に、教育、啓発活動の重要性を実感した。客観性を保つために現場と一定の距離を置

いて論評するジャーナリストから、現場に飛び込んで問題把握に努め、教育、実践活動をするアクアコミュニケーターと呼ぶビジネスに軸



足を移すようになった。

迫る水リスク

しばしば市民との対立構造にある企業には、操業、財務、法的、評判といったリスクがある。操業・財務リスクとしては、近年の異常気象による洪水や渇水問題がある。タイの進出日系企業が洪水被害で操業停止、大きな損害を受けた。生産活動には多量の水が必要となるが多くの日本企業が進出する中国の渇水は深刻だ。

遠因にチベットの降雪が降雨へと移行していることがある。雪は雪氷となり時間をかけて水流となるが、雨は一気に流れくだるため、洪水・渇水問題が発生する。流量が豊富な長江も流域の経済発展と工場廃液、農業などによって汚染されている。長江から黄河などの河川に水を迂回させる「南水北調プロジェクト」は水質改善を含めて、莫大な費用が必要となっている。

日本の自治体では地下水保全条例を制定する機運が高まっている。背景には①地下水くみ上げによる地盤沈下、②外国資本による水源開発・土地購入、③国内企業や社会インフラ整備に起因する地下水枯渇化などがある。

流域の水には表流水と地下水がある。表流水は人工的に流れを変えうるが、地下水はDNAとして保存されており、これが変わることはない。豊かな流域を保全するためには、汚さない、採取を減らす、再利用する、涵養する、という4つのアクションが必要である。

FEWLINKの最適化

水問題を解決するために「FEWLINK」（下表）という新用語を編み出し、中国や熊本で実践した。FはFood、Forest、EはEnergy、WはWaterであり、F・E・Wが相互に関係しあい、環でつながっている状態を指している。

水の循環で生まれる川や地下水の流れ（流域）が町と町を結び、暮らしの単位を形づくっている。流域内でFEWを大切にし、活用する方法を模索することで、持続可能なまちづくりのアイデアが生まれる。FEWLINK表

リンク	因子	問題点	対策・効果
E→W	浄水・水処理・導水・淡水化	エネルギー消費	浄水方式見直し、小規模分散型浄水、水資源保全
W→E	水力発電・小水力発電		
F→W	肥料・農業・家畜糞尿、食糧生産で水涵養	水質保全 水資源保全	糞尿による水質汚染防止、地下水涵養（水田の活用）、米食
W→F	食糧生産 国産飼料米生産	水消費	節水型農業の誕生 水不足国から穀物輸入をしない、輸入量減少
W→F	植物の生育		
F→W	植林・森林保全	保水能力・浄水能力	
F→E	家畜糞尿		バイオエネルギー
E→F	食糧輸送	輸送エネルギー	輸入飼料から国産飼料米へ 輸送エネルギー削減